

三木市文化研究資料 22集

兵庫県三木市

ふく いは ど るい
福井土塁E遺跡

— 株式会社 ミヤナガ工場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2010. 3

三木市教育委員会
株式会社 ミヤナガ



本調査区西より

序 文

播磨東端部に位置する三木市は、加古川より分かれ市内を東西に貫流する美義川の豊かな恵みにより、太古より多くの人々が生活を営み、特色ある歴史や文化を育んできました。

その代表的な歴史として、戦国時代に織田方から派遣された羽柴（豊臣）秀吉が三木城主別所長治を攻めた「三木合戦」は当市のみならず、全国的にも有名な出来事です。

秀吉は、三木城の周囲に付城と幾重にも土星（多重土星）を築いて包廻し、別所方を城にたてこもらせ食料を断つ兵糧攻めの戦法を取りました。現在でも市内各所に付城と多重土星が残っています。

さて、今回、市内の企業（株）ミヤナガの工場の増設が計画されその予定地に土星があり、発掘調査を行い、郷土の貴重な文化財として記録を残すこととなりました。調査が進む中で、山の尾根上約200mにも渡って堅固な土星が築かれていたことがわかりました。あらためて三木合戦の激しさや戦法の巧みさなど、当時を思い起こす時、想像をたくましくするとともに深い興味を覚えます。

三木市教育委員会では、三木城跡及び付城跡群を国の指定史跡にする作業を進めています。今回の調査成果が、本市にある三木合戦関連遺跡に対する市民の関心を一層高めるとともに、貴重な研究資料として多くの人々に活用されることを、誠に意義深くうれしい限りであります。

最後になりましたが、今回の調査の計画から実施、まとめに至るまで、終始大変なご苦労をいただいた関係各位に、感謝申し上げますとともに、（株）ミヤナガ様には、多大なる調査協力をしていただきましたことに厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

三木市教育長 松 本 明 紀

ごあいさつ

弊社工場拡張のため、予定地の埋蔵文化財調査をお願いしたところ、戦国時代の武将 羽柴秀吉が作ったといわれる土塁あとが260メートル近くも残っているとのことでした。大変、驚いたことは言うまでもありません。

三木市の歴史の中で重要な戦国時代「三木合戦」に関連する遺構とのことで、郷土の歴史、文化財を保護するため発掘調査のお手伝いをさせていただきました。

落ち葉の積もる雑木林がツルハシやスコップで丁寧に掘られ、黄色の山肌が見え出すと、やがて私の眼前には今から430年前の中世戦国時代の土塁の姿がよみがえりました。日本全国、さまざまな個性を持った戦国武将たちが群雄割拠した時代、秀吉が、またその家来たちがわが社のこの地を行きかい、天下統一の夢に思いを馳せたのでしょうか。そう考える時、歴史のロマンに心震わせるのは、私だけではないでしょう。

私ども株式会社ミヤナガは、各種穴あけ工具専門メーカーとして、大正5年(1916)の創業以来、現在に至るまで、「作業性」「耐久性」「安全性」など、さまざまな角度から時代に対応する独自の優秀な製品を生み出してきました。当社の「穴あけ」に対する高度な技術とこだわりが、国内はもとより海外でも高い評価を受けていると自負しております。

今回の(株)ミヤナガ地内「福井土塁E」遺跡の発掘調査での「穴あけ」が、必ずや三木合戦の全貌や謎を解明する突破口になると信じております。

最後になりましたが、今回の調査でお世話になりました関係各位に敬意を表するとともに、今回の調査の成果が今後の歴史研究に役立つことを祈念いたします。

平成22年3月

株式会社 ミヤナガ

代表取締役社長 宮 永 淳

例　言

1. 本書は、株式会社 ミヤナガ工場建設に伴い発掘調査を実施した、福井土塁E遺跡（三木市福井）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社 ミヤナガの委託を受けて、三木市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成17年度に試掘調査、平成20年度に本調査を実施した。
4. 発掘調査の掘削については株式会社 マツダ建設（兵庫県三田市）、空中写真と測量、作図等については有限会社 アムキー（兵庫県三田市）が担当した。
5. 遺跡の測量は国土座標（第V系）を基準とし、標高は東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした海拔高度である。
6. 本書の編集と執筆は、畠中 剛（三木市教育委員会）が行った。
7. 土塁の高さの推定計算については、各務文敏氏、報告書の作図については西牧正美氏に協力を得た。
8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図と三木市発行の2千5百分の1、1万分の1都市計画図を加工したものである。
9. 発掘調査で得た遺物、図面、写真は三木市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査、報告については、下記の諸氏にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略、順不同）

平田博幸　　西阪義雄　　宮田逸民　　山上雅弘　　森下大輔　　藤原清尚
西田　猛　　各務文敏　　西牧正美

株式会社 ミヤナガ　　株式会社 マツダ建設　　有限会社 アムキー

本文目次

	ページ数
はじめに	
第1章 遺跡をとりまく環境	2
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査の経緯と経過	5
第1節 調査にいたる経緯	
第2節 調査の経過	
第3節 調査体制	
第3章 福井土星E遺跡の調査	8
第1節 福井土星E遺跡の立地	
第2節 調査の方法	
第3節 遺構	
土 星	
第4節 土星の構造	
第5節 土星からの眺望	
第6節 その他の遺構	
炭土坑	
不明遺構	
第4章 その他の調査	23
第1節 西尾根地点	
第2節 本調査区外東西の調査	
第5章 遺 物	24
第1節 石 器	
第2節 土 器	
第6章 まとめ	25
第1節 福井土星の復元	
第2節 多重土星について	
第3節 炭土坑について	
第4節 福井土星E遺跡のすがた	

挿図目次

第1図 三木市の位置	1
第2図 付城・多重土塁分布図	4
第3図 調査区	9
第4図 調査前地形図	11
第5図 調査後遺構図	14
第6図 T-1 土層断面	15
第7図 T-2、3、5 土層断面	16
第8図 T-4 土層断面	17
" b " "	18
第9図 T-6 土層断面	19
第10図 炭土坑	20
第11図 西尾根地区T-B、C、D、E、F 土層断面	21
第12図 T-A、G、I 土層断面	22
第13図 出土石器	24

表目次

表1 炭土坑一覧	13
表2 石器観察表	24
表3 調査による掘削断面・掘削土量	25
表4 土塁高さ計算表	26

カラー写真図版目次

カラー写真図版 本調査区西より	卷頭
-----------------	----

写真図版目次

写真図版 1	上：調査区（南より） 下：調査区（北より）
写真図版 2	上：調査区（東より） 下：調査区（南東より）
写真図版 3	上：遺構検出状況（東端より） 下：遺構検出状況（中央部から西方向へ）

- 写真図版 4 上：調査後真上より（東）
下：調査後真上より（西）
- 写真図版 5 上：調査後（東端より）
下：調査後（中央部から西方向へ）
- 写真図版 6 上：調査後（中央部から東方向へ）
下：調査後（北から南方向へ）
- 写真図版 7 上：T-2 土壙土層断面
中：T-3 土壙土層断面
下：T-6 土壙土層断面
- 写真図版 8 上：土壙の状況（正面から）
中：土壙の状況（斜めから）
下：土壙の状況（横から）
- 写真図版 9 上：炭土坑1（南より）
中：炭土坑2（南より）
下：炭土坑3（南より）
- 写真図版 10 上：炭土坑群検出状況（西より）
下：炭土坑群精査後（真上より）
- 写真図版 11 上：西尾根地区（北より）
中左：Bトレンチ（南より）
中右：Bトレンチ土層断面（西壁）
下左：Fトレンチ（北より）
下右：Fトレンチ土層断面（西壁）
- 写真図版 12 出土遺物 石器
- 写真図版 13 上：福井土壙G（東より）
中：福井土壙G（西より内部）
下：福井土壙G（土壙越しに雌岡山を望む）
- 写真図版 14 上：発掘調査風景
中：木の根の除去
下：本調査区南東廃土風景

はじめに

三木市のある兵庫県は、瀬戸内海から日本海に渡って広がる県域である。福井土塁の所在する三木市は、兵庫県の南東部に位置する内陸の都市である。平成17年10月に北東に隣接する美嚢郡吉川町と合併し新たな三木市となっている。東及び南は神戸市、南西は加古郡稲美町、西は加古川市、北西は小野市、北は加東市、北東は三田市と境界を接している。近世以前の旧分国では、播磨の美嚢郡に属する。



第1図 三木市の位置

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

三木市の地形は、市域の大部分を丘陵・台地・平野で占め、わずかな山地とからなる。市の東部は帝釈山地さらには六甲山地へと続き、市の西部は丘陵や台地が広がる。これらの山地や丘陵に水源を発した美嚢川や支流である志染川・小川川・淡河川などの美嚢川水系は西流し、別所町正法寺付近で加古川に合流する。加古川は瀬戸内海に注ぎ、古くから河川交通が盛んであった。市域はこれらの河川によって形成された沖積平野及び河岸段丘からなる。

丘陵と台地は、市北東部の美嚢川より北の小野丘陵、美嚢川と小川川に挟まれた吉川丘陵、小川川と志染川に挟まれた細川丘陵、志染川の南に展開する志染丘陵、志染川上流の帝釈山地、市西部の美嚢川南岸より明石市・加古郡稻美町へ広がる東播台地の6つの地域に分けられる。これらの丘陵や台地、河川の浸食作用によって形成された開析谷を縫うように有馬道・明石道・兵庫道・姫路道などの陸上交通が発達してきた。

今回、調査を実施した福井土里E遺跡は、この東播台地を構成する大阪層群の高位段丘の上に築かれている。

第2節 歴史的環境

三木市において、最も古く人間の行動が確認できるのは旧石器時代である。美嚢川を望む段丘上の別所町和田の白長大神社散布地、与呂木宮ノ元遺跡で後期旧石器が出土している。続く縄文時代は、志染町の窟屋1号墳下層や戸田遺跡で、土坑を検出し、その中から後期の土器が出土している。周辺の段丘上に旧石器及び縄文時代の遺跡が存在するものと思われる。

弥生時代は、市西部の美嚢川の北側丘陵で、年ノ神遺跡や和田神社遺跡などの中期から後期にかけての集落が確認されている。また、美嚢川と志染川が合流する東側段丘や志染川南側段丘でも、与呂木宮ノ元遺跡や与呂木大畠遺跡、宿原岡ノ下遺跡、小戸田遺跡などの中期から後期の集落が確認されている。

古墳時代になると、台地や斜面地、段丘の至るところに中期から後期にかけて数多くの古墳が築かれるようになる。美嚢川と加古川の合流地点、市西部の美嚢川に臨む南側及び北側丘陵、志染川の南側丘陵に集中している。全長91mの前方後円墳である愛宕山古墳（三木市指定文化財）や年ノ神6号墳からは三角板革綴短甲、窟屋1号墳では金銅装單鳳環頭太刀柄頭が出土しており、中央との繋がりが注目されている。集落は、西ヶ原遺跡とその西側段丘で久留美田井野遺跡が確認されている。

奈良時代以降、三木の特色となる窯業生産が始まると、最盛期は12世紀の平安時代後期鎌倉時代初期で、尊勝寺や鳥羽離宮などの院に関係する寺院や邸宅に瓦を供給していたことが確認されている。窯跡は、跡部・久留美・平井・与呂木・宿原に分布している。

南北朝時代には、古代からの名刹の伝承をもつ高男寺廃寺遺跡より、『貞和二季』（1346）銘の入った瓦が出土している。また、三木合戦時の付城跡と考えられていた和田村四合谷村

ノロ付城跡から嘉暦二年（1327）銘の入った硯をはじめ、南北朝期の遺物が数多く出土していることから、暦応二年（1327）に南朝方の丹生山城を北朝方の赤松氏が攻めるために集結した「志染軍陣」の可能性が指摘されている。

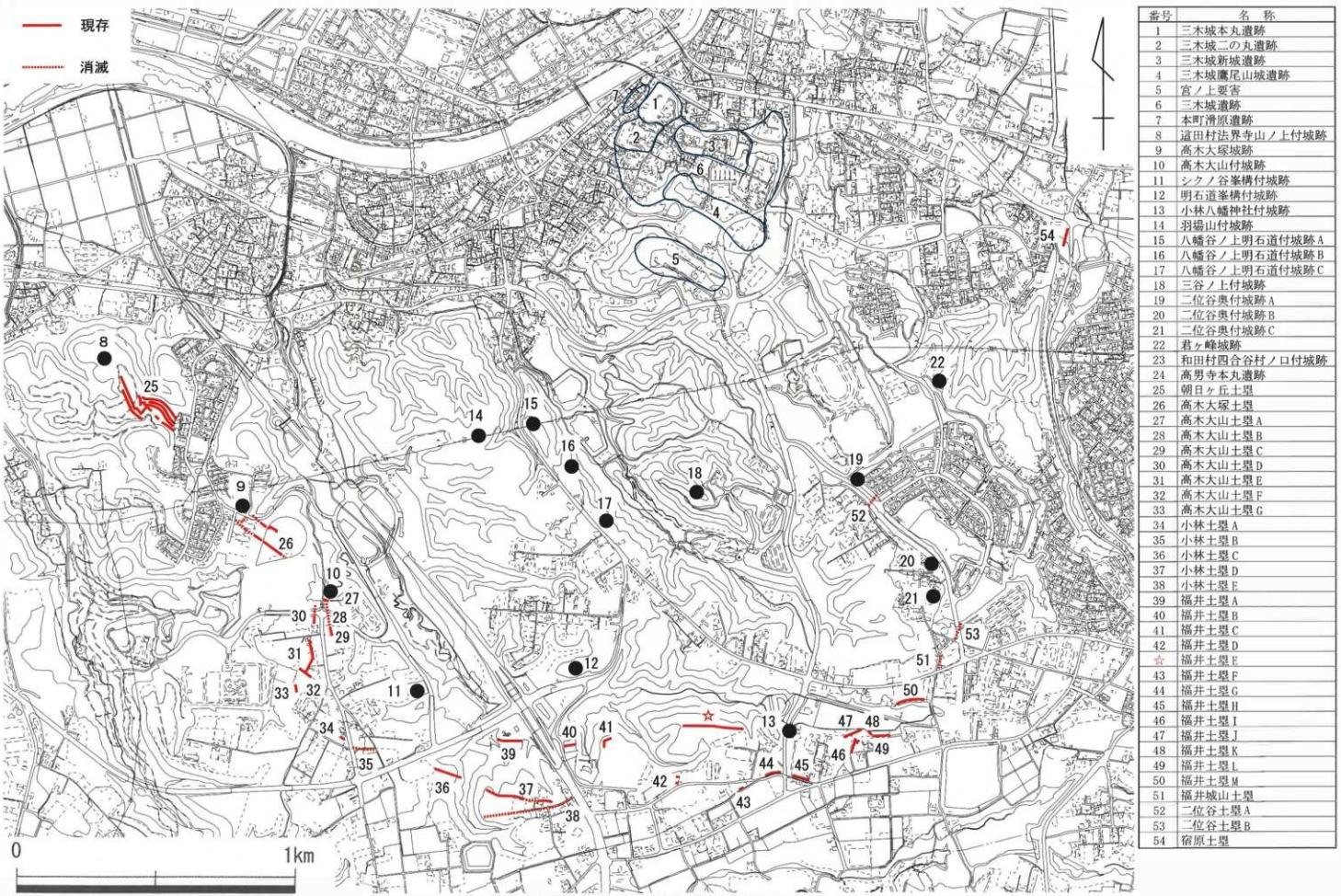
室町時代になると播磨の守護を赤松氏が務めている。赤松満祐によって6代將軍足利義教が殺害された嘉吉の乱により、山名氏にその座を奪われた。応仁の乱の後、赤松氏は播磨の守護に復帰するが、やがて赤松氏に代わって実権を握っていくのは有力被官であった。その中の別所氏は、東播磨で勢力を持ち、則治が15世紀末に三木を本拠地とし、三木城を築城したといわれている。三木城は、本丸・二の丸・新城・鷹尾城・宮ノ上要害からなる。本丸では二分する堀を確認し、二の丸からは備前焼大甕群や建物跡、堀の遺構を確認している。

天下統一を目指す織田信長は、毛利氏を攻める足掛かりとして天正5年（1577）に播磨攻めを家臣の羽柴秀吉に命じた。当初、別所氏の当主長治は織田方に味方していたが、天正6年（1578）に突然毛利氏に寝返った。織田方は三木城を攻略するために三木城の周囲に付城群を築いて包囲し、兵糧攻めをおこなった。付城は毛利氏からの兵糧搬入を阻止するために、状況に応じて増やされ、30余りの付城と今回調査の多重土塁も築かれたといわれている。やがて、三木城内の兵糧が尽き、天正8年（1580）1月、城主長治が領民の助命と引き換えに、自刃して開城した。

その後、織田・豊臣の支配下となり、秀吉の家臣が相次いで城主となり、関が原合戦後は、姫路城主池田氏の家臣が城主となって三木城は存続したが、江戸幕府による一国一城令の政策に伴って、元和元年（1615）に廃城となった。以後、城下の三木町は在郷町と性格を変え、中期以降多くの大工職人が三木町に移住し、大工道具の需要が増えたことで金物職人も増加していく、金物の町として繁栄し現在に至っている。

（参考文献）

- 三木市『三木市史』1970年
- 三木市教育委員会『三木市遺跡分布地図』三木市文化研究資料 第17集 2001年
- 兵庫県教育委員会『年ノ神遺跡』兵庫県文化財調査報告第235冊 2002年
- 兵庫県教育委員会『和田神社遺跡』兵庫県文化財調査報告第238冊 2002年
- 兵庫県教育委員会『与呂木遺跡』兵庫県文化財調査報告第133冊 1994年
- 兵庫県教育委員会『年ノ神古墳群』兵庫県文化財調査報告第234冊 2002年
- 兵庫県教育委員会『窟屋1号墳』兵庫県文化財調査報告第353冊 2009年
- 兵庫県教育委員会『西ヶ原遺跡』兵庫県文化財調査報告第151冊 1996年
- 兵庫県教育委員会『田井野遺跡』兵庫県文化財調査報告第154冊 1996年
- 兵庫県教育委員会『久留美・跡部窪跡群』兵庫県文化財調査報告第186冊 1999年
- 三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』II 2000年
- 兵庫県教育委員会「和田村四合谷村ノロ付城跡」「ひょうごの遺跡」50号 2004年



第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今からおよそ430年以上前の天正6年（1578）から天正8年（1580）にかけて、別所長治が三木城主の時、毛利氏を攻略し、中国平定をしようとした織田信長に抵抗して、羽柴秀吉率いる織田軍団と2年間にわたる合戦を行った。秀吉は、難攻不落を誇る三木城をなかなか攻略できなかつたため、三木城の周辺の別所方の城を順に攻め滅ぼし、最後に三木城の周りに付城（つけじろ・・・敵の城を攻略できそうにない場合、敵城および領内を押さえる要地に、味方の軍勢を置きその周辺地域を鎮圧するために築いた城を築き、多重土壘（たじゅうどるい・・・二重、三重になった土壘）をめぐらし、兵糧攻めという当時では奇策を用いて城兵を苦しめた。今回調査した福井土壘Eもその一部である。

平成17年、市内の企業、株式会社 ミヤナガ（以下、ミヤナガと称する）より、工場増設に伴い、計画地内に埋蔵文化財が存在するかどうかの照会があった。計画地はミヤナガ本社工場（三木市福井2393番地）の北側の三木山国有林一帯、約9haの広範囲にわたるものであった。

計画地には、三木市遺跡分布地図によると、No.346（本書第2図では☆印）の「三木合戦包围網多重土壘 福井土壘E」と称される、南より続く台地から西へと派生する尾根の稜線と並行に、東西約200m、高さ1.5mの土壘の存在が記されている。さらに現地にて分布調査を実施したところ、全長はほぼ記載どおり約200m、高さは地表面のわずかな隆起～60cm前後で成人が簡単にまたぎこせるようなもので、1.5mという記載よりほとんどの地点で低いものであった。

さらに詳細なデータを得るために、平成17年8月4日から10月31日の間、グリッドとトレンチによる確認発掘調査を実施、予想どおり土層の状況等から土壘が認められ、加えて周辺で柱穴、溝状遺構を確認し遺跡の存在が確認された。

こうした確認調査の結果に基づき再度ミヤナガとの保存協議を行い、工法変更などによる現状保存を強く要望したが、工法変更は不可能という最終回答を受けた。

平成18年1月、二者協議の工法変更是不可能という結果をふまえて、兵庫県教育委員会との協議にのぞみ、現状保存が不可能な場合、当該遺跡の全面調査による記録保存の処置で対応することもやむをえないとの結果に至り、ここで正式に全面発掘調査の実施が決定した。

その後、市教委が調査方法や調査費の見積もりをミヤナガに提示、平成20年8月、ミヤナガの調査費全額負担のもと現地の樹木伐採が行われ、同年9月、約7,300m³の発掘調査を開始した。

第2節 調査の経過（項目は主要な作業のみピックアップ）

平成20年9月 上旬 伐採完了

9月17日 調査開始 （株）マツダ建設、（有）アムキー、市教委、ミヤナガによる現地立会い、打合せの実施。

- 18日 調査区画の設定（杭打設）。
- 22日 ラジコンヘリによる調査前空中写真撮影と図化に伴う対空標識の設置と、20mメッシュの標準杭の打設と観測。
- 23日 調査掘削範囲の設定
- 24日 確認調査のトレンチの再検証（土層について）
- 26日 調査事務所設営
- 10月2日 本格的な掘削（遺構検出）作業開始（東より西へ進行、土壘南北は人力掘削、他は遺構面と想定される層の直上まで機械掘削）。
廃土は調査区の南西端にキャリィで集積
- 3日 西尾根の調査 B～F トレンチ機械掘削
- 11月4日 三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会委員1名、部会委員1名、他1名現地指導に来訪。
- 14日 No. 0～9区の遺構検出完了。高所作業車により全景について調査員による写真撮影（土壘沿い南北の溝状遺構、焼土遺構の検出）
- 18日 遺構精査開始（主に土壘南北の溝内掘削）、電動ベルトコンベアー導入。遺構、土層の写真撮影と実測作業随時
- 19日 現場事務所を寒風に備え、テントからスーパーhausに変更。
- 12月17日 兵庫県教育委員会現場視察と指導
- 18日 遺構精査終了
- 19日 清掃
- 23日 図化に伴う対空標識の設置
- 25日 ラジコンヘリによる調査後空中写真撮影
- 26日 仕事納め 片付けなど
- 平成21年1月5日 仕事始め 西側山林内調査（西側への土壘延伸の確認）
9日 土壘、炭土坑断ち割り調査
- 17日 調査終了 現地説明会（参加約70人）
- 以上、平成20年9月7日～平成21年1月17日
133日間（土、日、祝日は基本的に休業）



兵庫県教育委員会現地指導



調査スタッフ打合せ

第3節 調査体制

平成17年度 確認発掘調査

事務局	三木市教育長	井本智勢子
	教育次長	小西 利隆
	社会教育課長	穂積 良夫
調査調整	同課長補佐	松村 正和
担当	同課主任	小網 豊

平成20年度 本発掘調査

事務局	三木市教育長	山崎 啓次
	教育振興部長	山本 和民
調査調整	文化スポーツ振興課長	松村 正和
担当	同課	主査 畠中 剛
		主任 小網 豊
		主任 廣井 愛邦

平成21年度 報告書編集作業

事務局	三木市教育長	松本 明紀
	教育振興部長	真嶋 信幸
	文化スポーツ振興課長	松村 正和
担当	同課	主査 畠中 剛
		主任 小網 豊
		主任 廣井 愛邦
		主事 金松 誠

第3章 福井土星E遺跡の調査

第1節 福井土星E遺跡の立地

今回の調査地点は、三木市福井 三木山国有林234班い小班で、県道神戸三木線の南側、東西に伸びる幅150mの谷を挟んだ、標高113.15m～115.75mを測る山の尾根上で、ミヤナガの工場敷地内にいえば南端の社屋のすぐ裏手の雑木林に当たる。

調査地点の東側は標高115m前後で斜面から平坦面に変換している。調査地点の中央部はほぼ平坦面でさらに西へと広がるが、西端の南北に派生する尾根の東側の谷部が入りこんでいる。

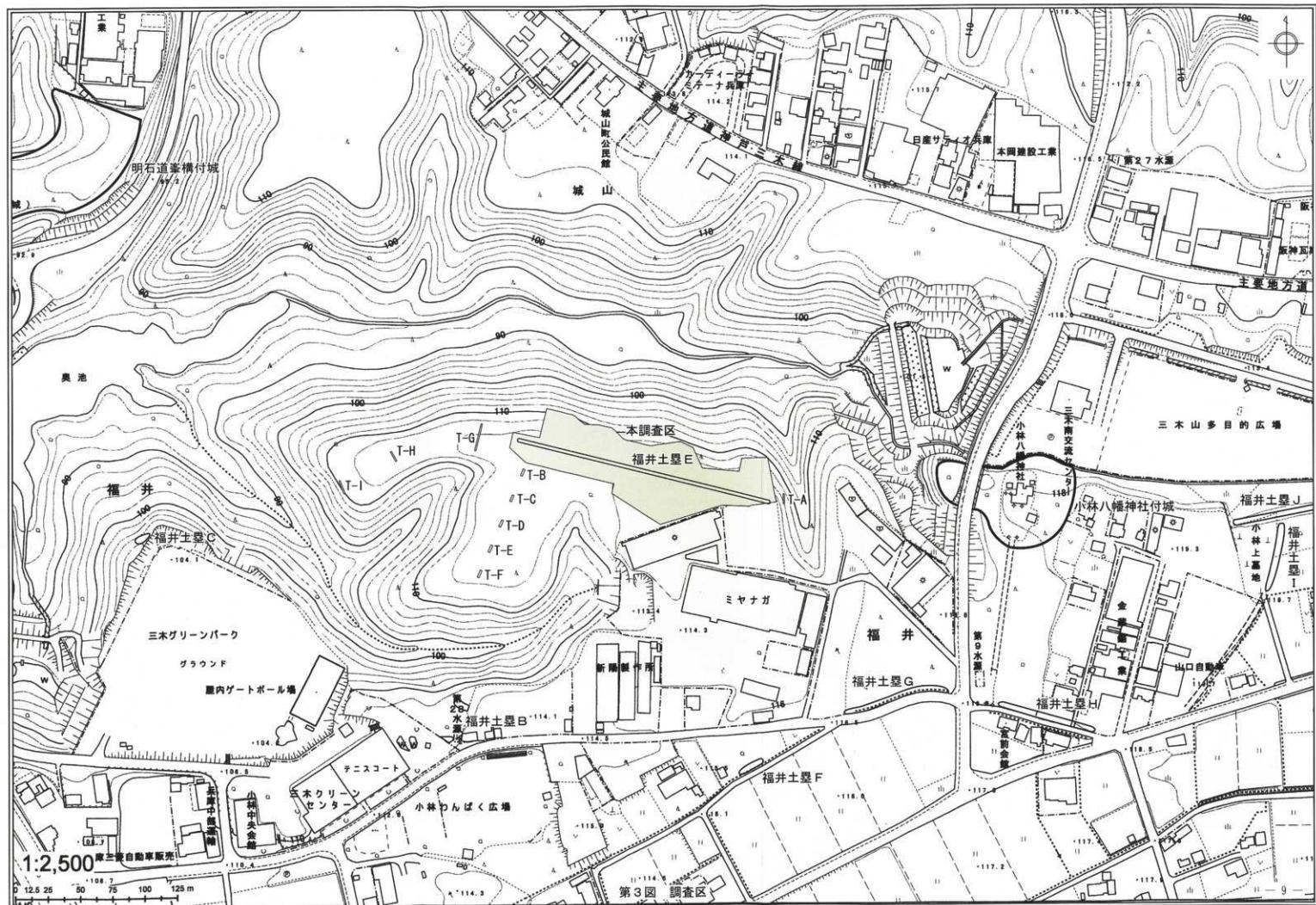
土星は、北方の谷からの斜面と、工場が存在する南へと続く平坦面の変換点に築かれており、それは、調査区東側で顕著である。中央部より西側は、西へと派生する尾根上の平坦面と、南へと派生する西尾根上の平坦面が南へと広がり、その真ん中を土星が貫通している。土星の西限は、西へと派生する尾根上の平坦面が続くものの、調査区の設定をした範囲までが、土星を肉眼で確認できる地点である。また東限については、工場の資材置き場に寸断されているが、そのすぐ東側は谷が入っているので現在確認できる所から、そう離れていない場所で収束していると考えられる。



南より調査区を望む

第2節 調査の方法

調査地点は、ミヤナガの開発計画に基づき、工場の北側の山林1.4haの範囲が発掘調査の対象区域となった。確認調査の結果では、土星は対象区域の中央よりやや北側で、東西に長さ約200m、幅約1m、高さは微細な隆起～60cm程度で存在していた。また、遺構は土星の他に、径15cm～40cm程度の柱穴が、熱処理工場棟の北東約40mの地点で約0.2m～0.3mの深さで、黄褐色土系の層を切り込んで存在していた。



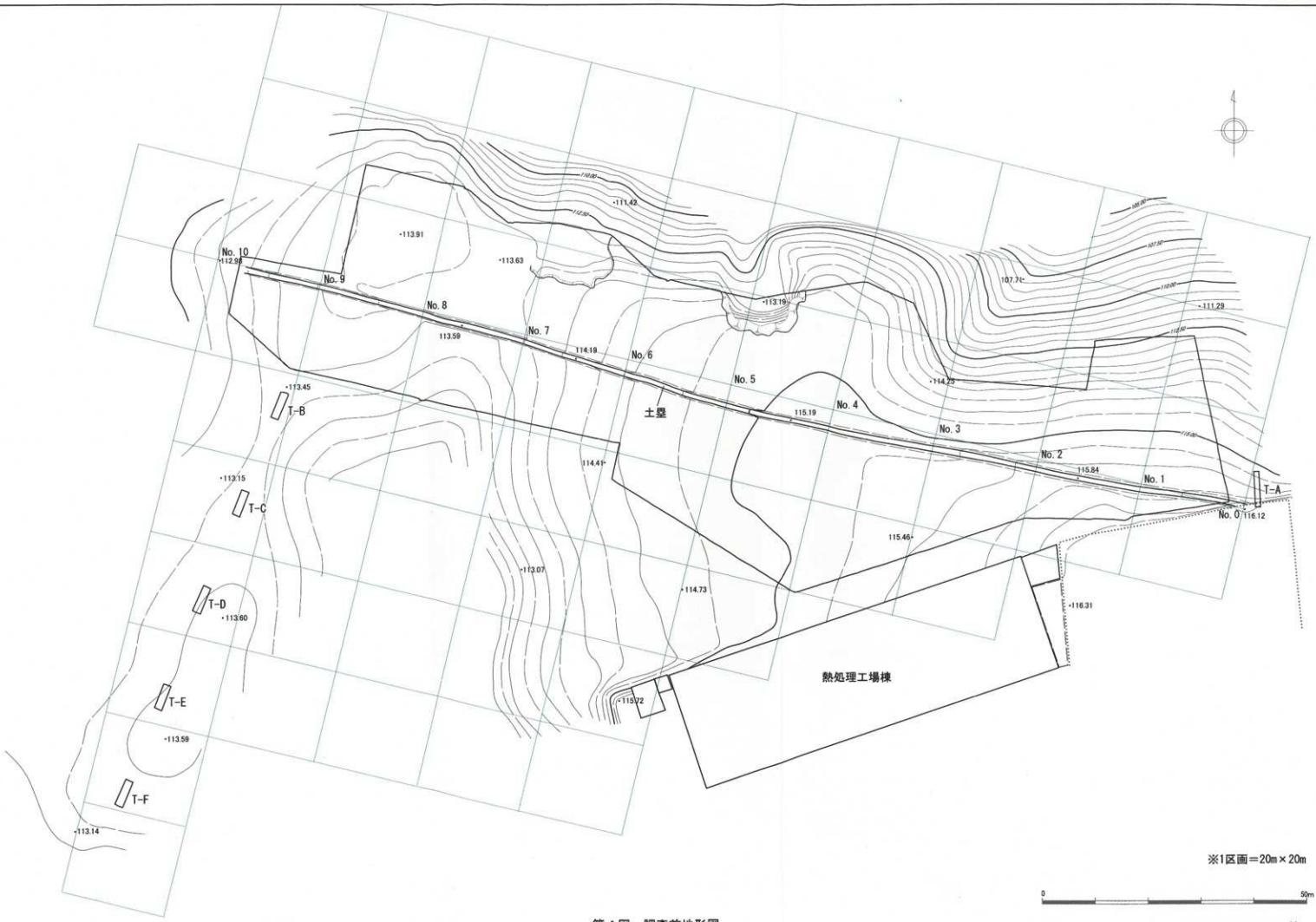
当初は、遺構の検出された東の範囲を全面調査掘削とし、西側はトレント及びグリッドによる調査を行い、遺構を確認した場合、順次、全面調査掘削へ移行する予定であったが、学術調査検討委員会から、調査予定地はすべて工場建設により工事掘削するのであるから、当初より全面調査掘削をする方が、遺構検出がわかりやすく、なおかつ調査期間の短縮ができるとの意見を頂き、工事対象区域内の確認調査で検出された遺構（土塁）の状況と地形に基づき、ほぼ全面を遺構直上まで機械掘削することとした。ただし、土塁の直上はすべて人力掘削、土塁の盛土の中心から南北に各々4mの範囲は、表土を小型機械により掘削の後、人力掘削を実施した。また、廃土は、調査区内に廃土によりキャリィが走行する仮設道路を作り、掘削地点から調査区南西端まで運び、集積した。なお、仮設道路は精査後の全景写真撮影前（遺構検出状況の際はそのまま）に撤去した。

調査区画の設定については、ほぼ中央部を横断するように東西のラインを設定するため、調査区の東西両端に一箇所ずつ基準杭を打ち、それを基準に20mピッチでセンターの杭を設置し、地形を考慮し、南北にそれぞれ20mピッチでさらに杭を設置し、20m×20mのグリッドになるように区画設定した。東から西へ0区、1区、2区…と呼称することとした。

また、調査区域内の西、熱処理工場棟の西側に小さな谷を挟んで南へ派生する尾根上（西尾根地点）に、遺構確認のためトレント5箇所（T-B～T-F）の設定、さらに調査終了間際、土地所有者であるミヤナガのご好意により開発区域外の東西の山林に、土塁の延伸を確認するためトレント4箇所（T-A, T-G～T-I）を設定した。



調査範囲の設定（白線がトレント枠）



第4図 調査前地形図

※1区画 = 20m × 20m



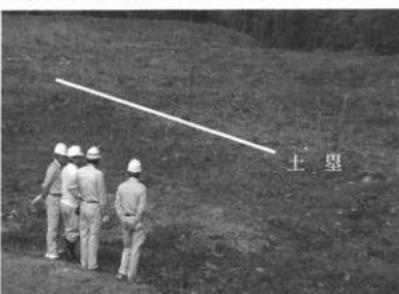
第3節 遺構

土壘

現状では、先述したとおり、東西に全長約200m、高さは肉眼で地表面からわずかな微細な隆起～60cm前後で成人が簡単にまたぎこせるようなものであった。精査は落ち葉、木の根を除去後、腐植土を除去し、土壘上や溝の傾斜部、底部などをはじめとして遺構検出につとめたが、調査区内では後述する「炭土坑」だけであり、土壘の性格や時期に関連する所謂、三木合戦の頗著な遺構は検出されなかった。

確認調査では土壘以外で柱穴遺構を検出したと判断したが、今回の調査で諸所に自然木の根が腐植した円形の痕

跡があり、中でも古い痕跡は暗灰色の粘質土に置換されていく状況が認められ、それが、あたかも柱穴と認識されそうな様相を呈していた。確認調査では非常に限られた小規模な範囲を精査するため、遺構と認識したが、全面調査では広範囲を精査できるため、柱穴等の頗著な遺構ではないと判明したものである。



土壘の痕跡

第4節 土壘の構造

本調査区の層序は、広範囲のトレーナーのため、東西南北によって微妙に異なるが、基本的には黄褐色系の土層で統一することができる。

基本層序は、I層－腐植土、II層－黄色土(2.5Y^{8/8})、黄褐色(粘質)土(2.5Y^{7/6})〔遺構面ベース〕、III層－赤褐色土、粘質土(2.5Y^{4/8})〔遺構面ベース〕であった。本調査区の土層はさまざまなバリエーションを持った黄色系の土であったのでII層が複数存在し、遺構面を決定するのに困惑した。別の表現をすれば落葉と腐植土、その汚れ土を完全に除去した後の、きれいな黄色系の土を切り込んで土壘の盛土を行っている。腐植土直下から構築しているというのが、最も簡潔な表現であろう。

土壘はII層(当時のベース)を切り込んで、基本ラインと幅の範囲を設定した後、その前後を掘削した土を盛土にして構築して行ったと考えられる。

土壘の規模は、検出長210m、基底部幅1.9m～2.85m、高さは溝底部より残存高で0.3m～0.5mを測る。また、土壘の土の積み方にについては、版築工法や盛土の中に、特に石や砂を混入するなどの痕跡も認められず、単に規格どおり周囲の土を掘削し、盛り上げただけと考えられる。

それに加えて、残存する盛土や経年による崩壊土の状況からは、北側へ、あるいは南側へと積み上げられた、あるいは、流れたというような頗著な片寄りの痕跡も認められなかった。おそらく、土壘を構築する東西のラインを尾根稜線上の最高所から、平坦面

になった微妙な所に、意図的かどうかわからないが、遙地がなされているためかも知れない。また、II層が遺構面ベースと決定したが、再度、遺構面確認のため、調査区の中央部No. 5、6区の南側をII層からの下層(III層)に遺構が無いか、約1,500 m²にわたり機械掘削で確認したが遺構は検出されなかった。

第5節 土壘からの眺望

調査地点の標高は113m～115mを測る。三木城本丸の標高は57m程度で、三木城本丸の方が低位にあるので、当然、視認することは容易であるはずであるができない。また、写真撮影のため導入した地上より20m程度リフトアップする高所作業車に乗りこみ、眺望を確認したが、樹木や建物などの障害物が無かったとしても、三木城本丸、二の丸を視認することが困難であると考えられる。

このことは、三木城の方向へほぼ直線状に視野を向ける時、本地点から北へ1.7kmの地点に存在する宮ノ上要害まで、調査区北方の谷から北へと大小の谷や尾根があるもののほぼ標高100m～115mの地形が180度の視野で広がる。さらに本地点南側に目を向けると、雄岡山までに広がる水田面も同様で、多少の高低差はあるもののまるで広範囲に開けた台地上のような感を受ける。つまり、台地の端、宮ノ上要害の標高100m前後から約40m下った標高57m程度に三木城本丸、二の丸は、台地の端から急に一段下がったところに存在している状況であるから、福井土壘Eより三木城本丸を視認することは困難であるといえる。

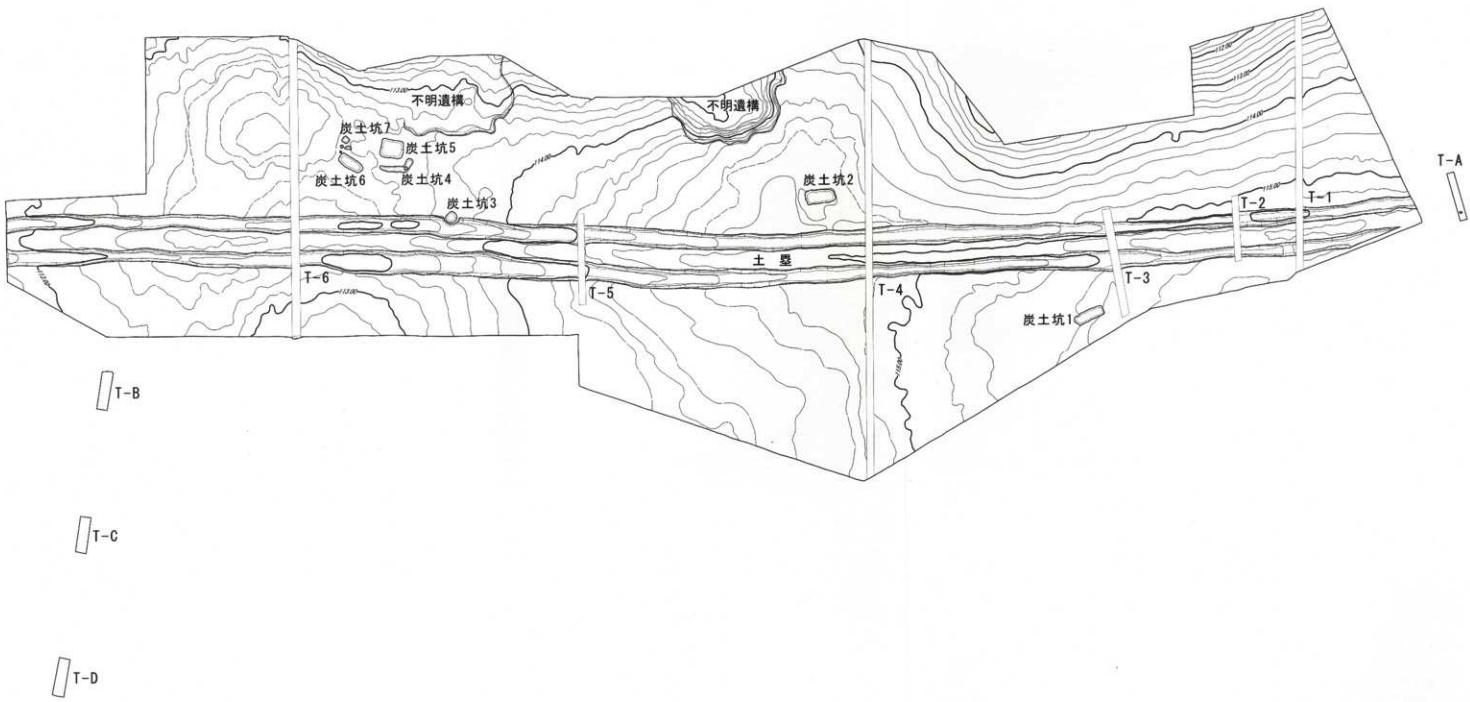
第6節 その他の遺構

炭土坑

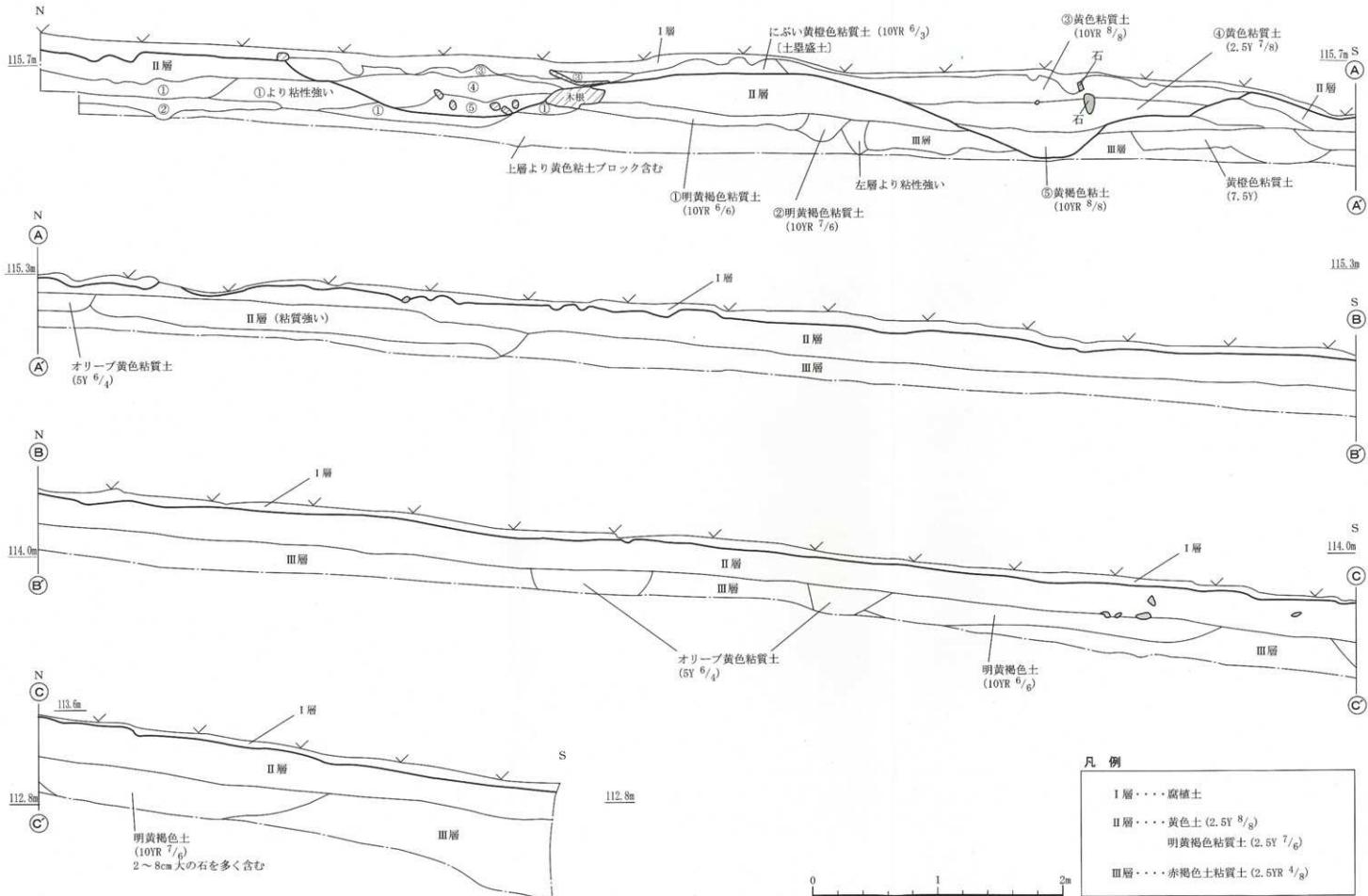
腐植土→II層を精査していく過程で、炭、灰、焼土などが検出され、方形、隅丸長方形、円形、楕円形などの形状を呈してきた。当初、この地点は近現代に人の立入が頻繁であったため、焚き火や野外での調理跡などの痕跡と想像されたが、検出された箇所の少ないとや、坑内や周辺で遺物が散布しないことから、2002年に市内志染町戸田遺跡で確認(兵庫県教育委員会調査)された「炭土坑」の可能性が考えられた。突出部や床面に溝は持っておらず、深さ0.1m前後、形状はほぼ水平なものであった。

番号	規 模 (m)	平面形態	突 出	向 き	突起方位	床面レベル	備 考
1	1.18 × 4.42 × 0.1	隅丸長方形	な し	並 行	な し	水 平	炭、灰、焼土
2	1.70 × 4.24 × 0.1	隅丸長方形	な し	並 行	な し	水 平	"
3	0.9 × 0.9 × 0.1	円 形	な し	一	な し	椀 状	焼土塊のみ
4	4.5 × 0.2 × 0.1	く の 字 形	一	一	一	椀 状	炭、灰、焼土、ビット
5	2.5 × 3.15 × 0.1	長 方 形	な し	並 行	な し	水 平	炭、灰、焼土
6	1.3 × 3.62 × 0.1	楕 圓 形	な し	直 交	な し	水 平	"
7	0.9 × 0.9 × 0.2	方 形	な し	一	な し	椀 状	炭

表1 炭土坑一覧

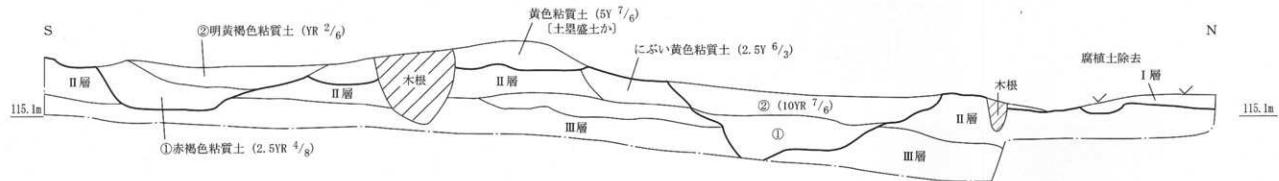


第5図 調査後遺構図

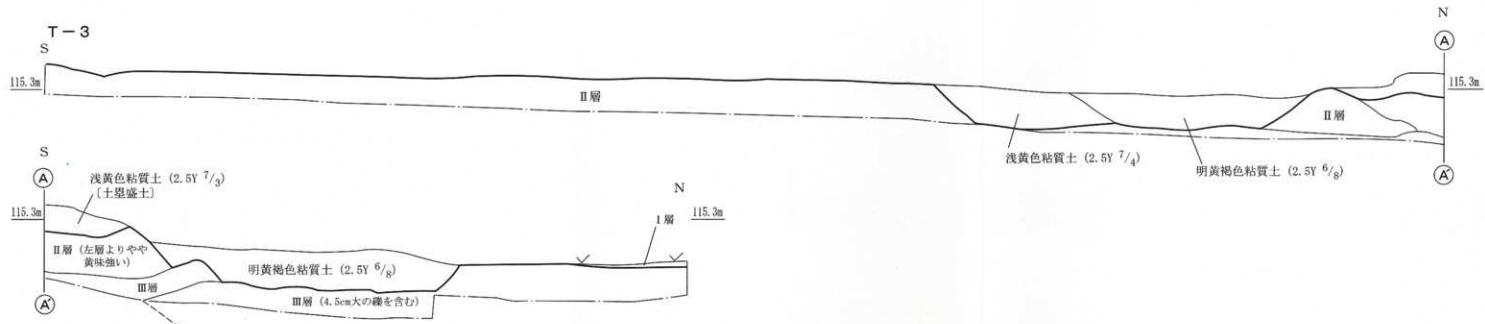


第6図 T-1 土層断面

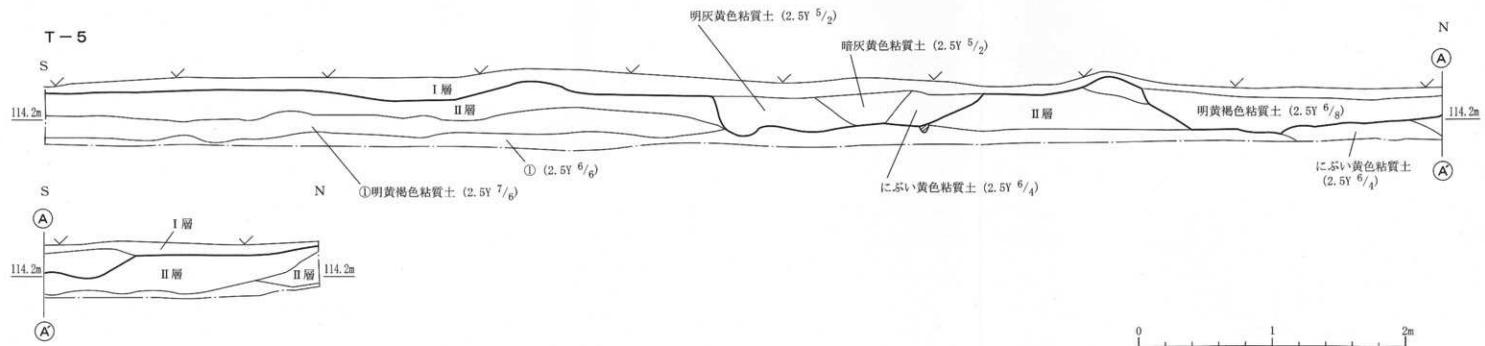
T-2



T-3

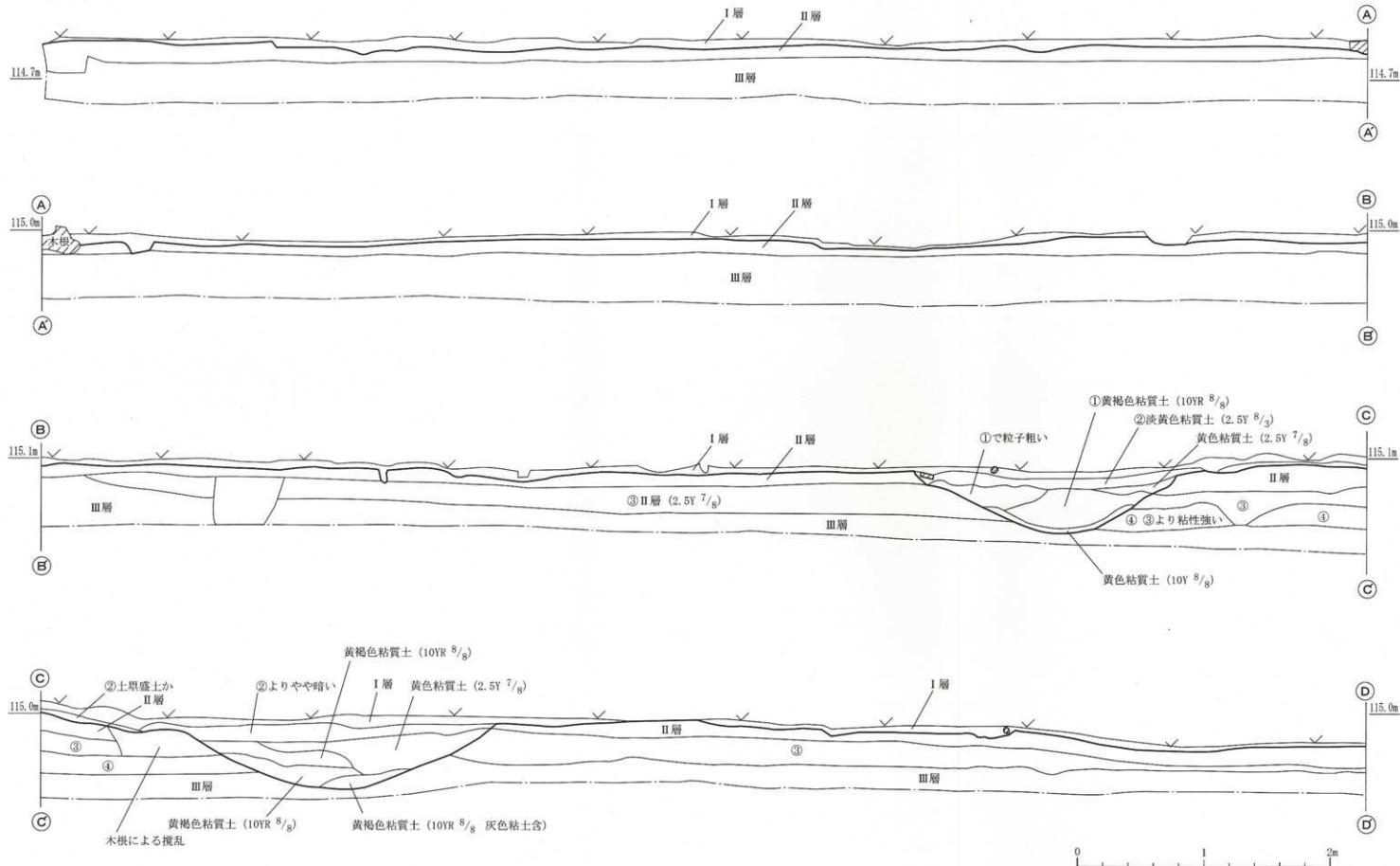


T-5

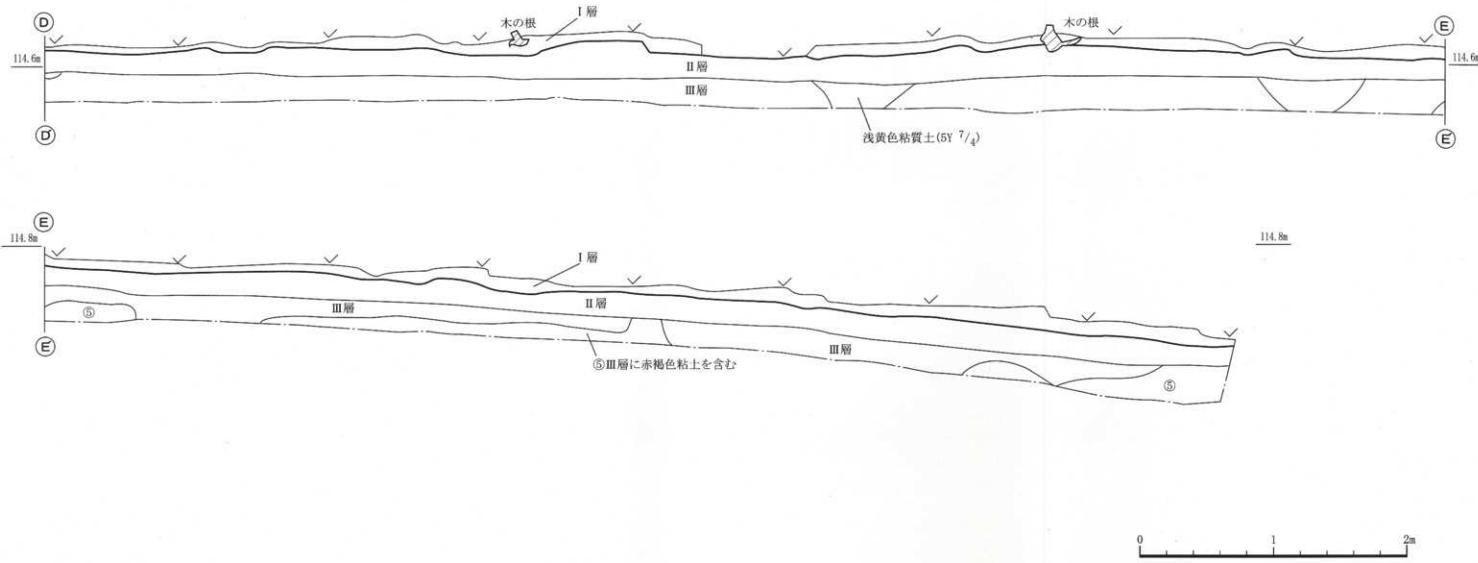


第7図 2. 3. 5土層断面

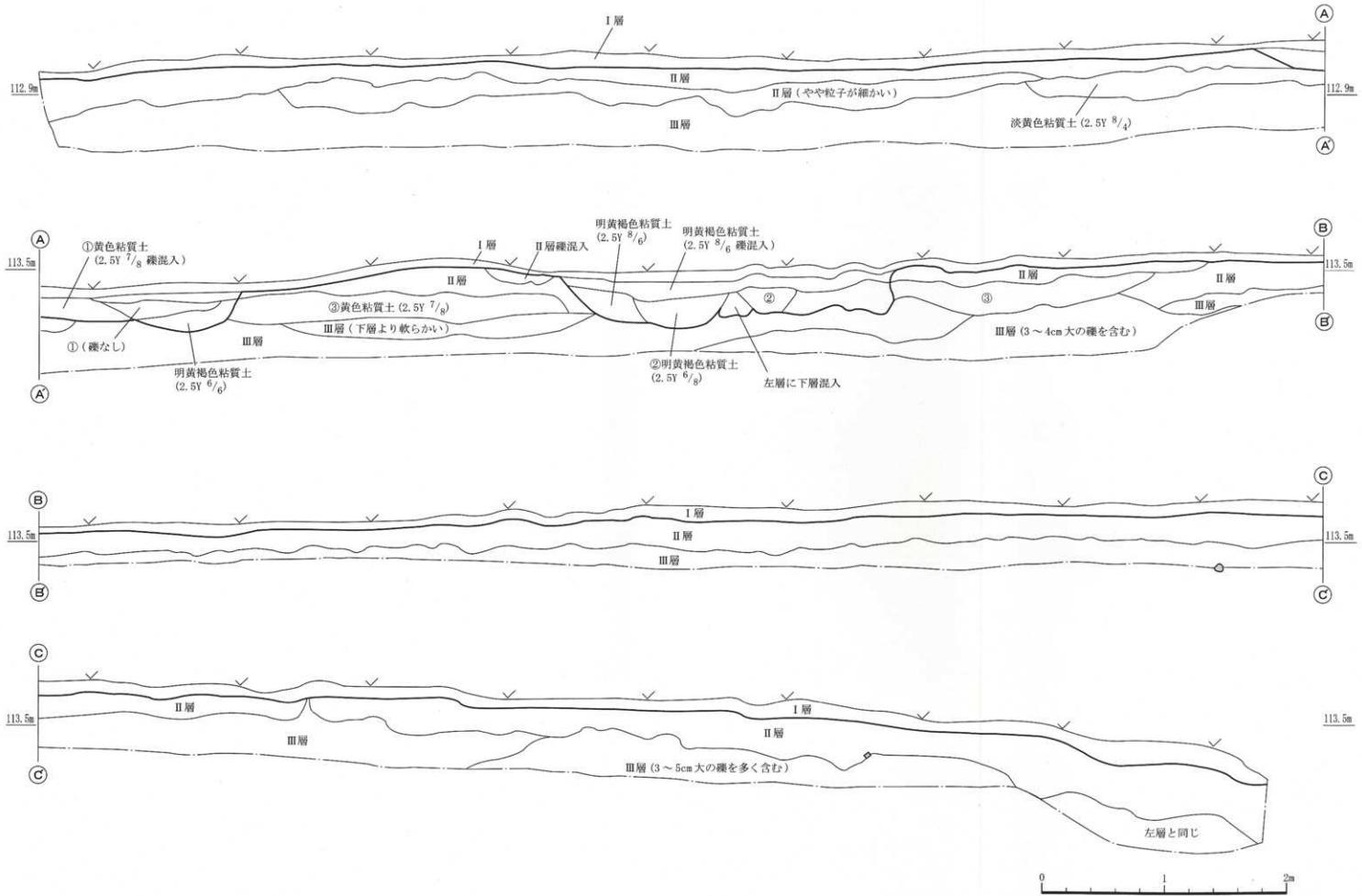
T - 4



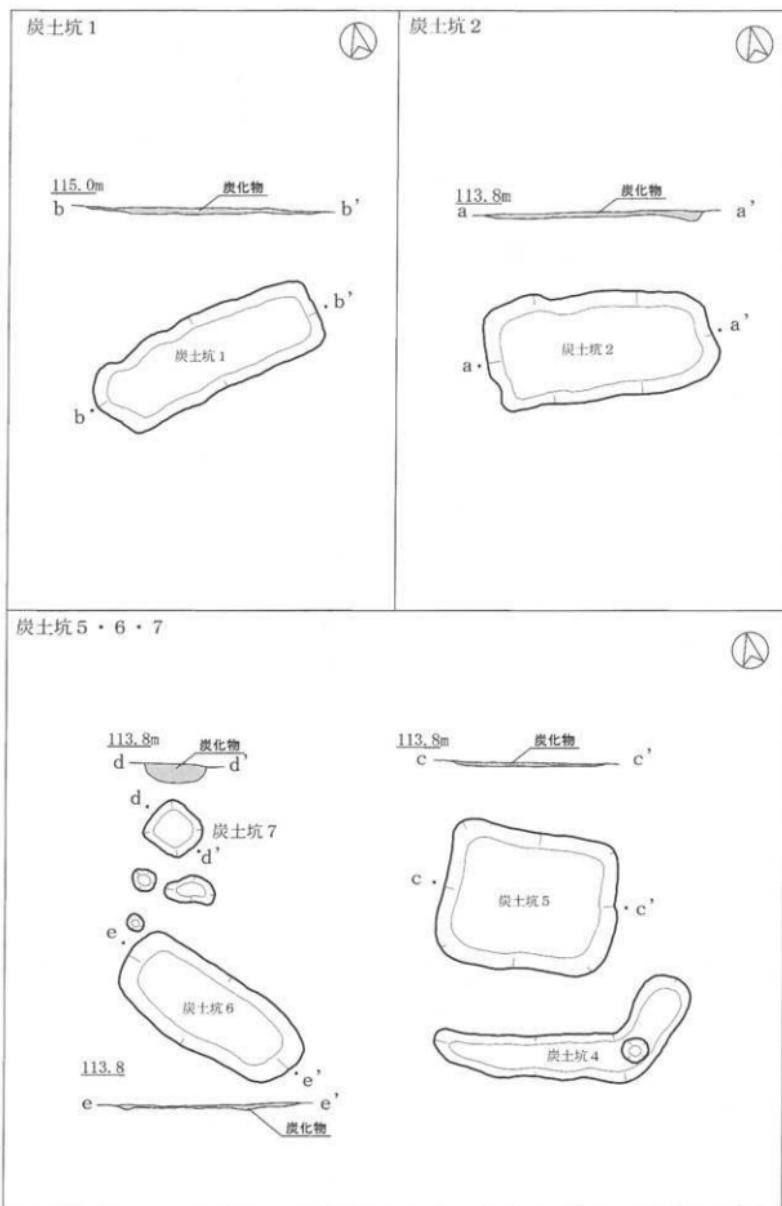
第8図 T - 4 土層断面



第8図-b T-4 土層断面

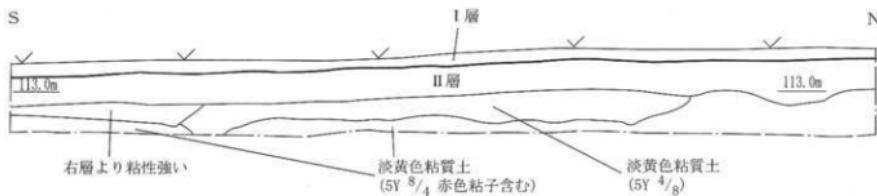


第9図 T-6 土層断面

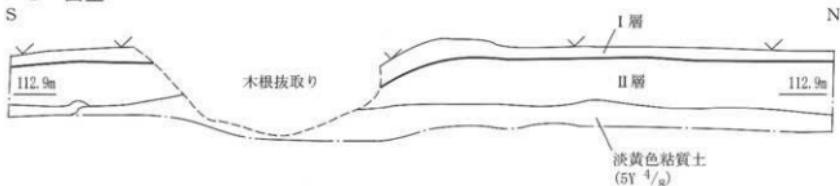


第10図 炭土坑

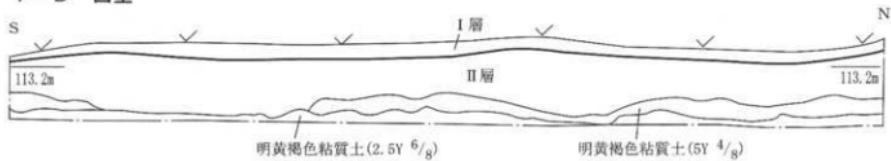
T-B 西壁



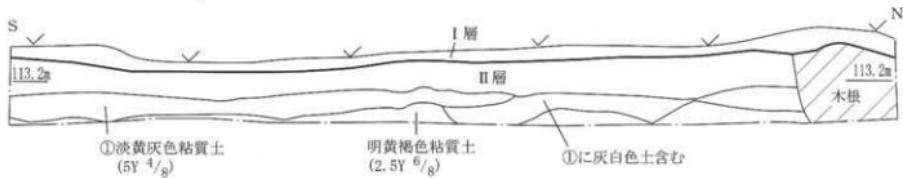
T-C 西壁



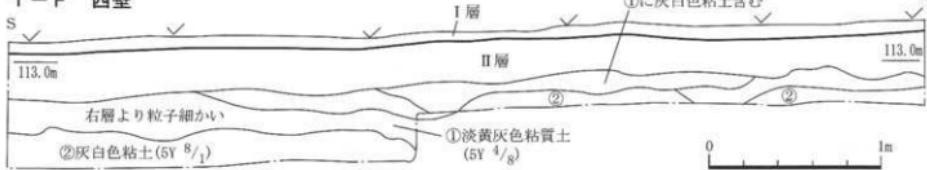
T-D 西壁



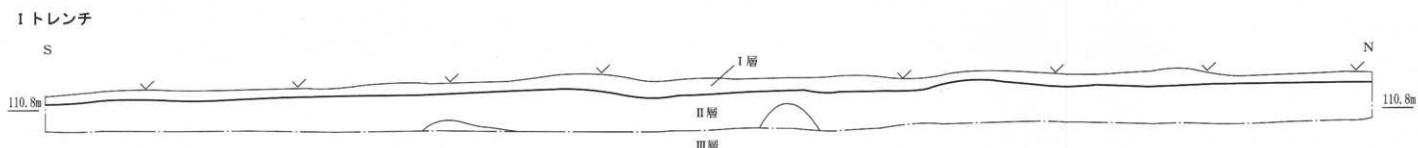
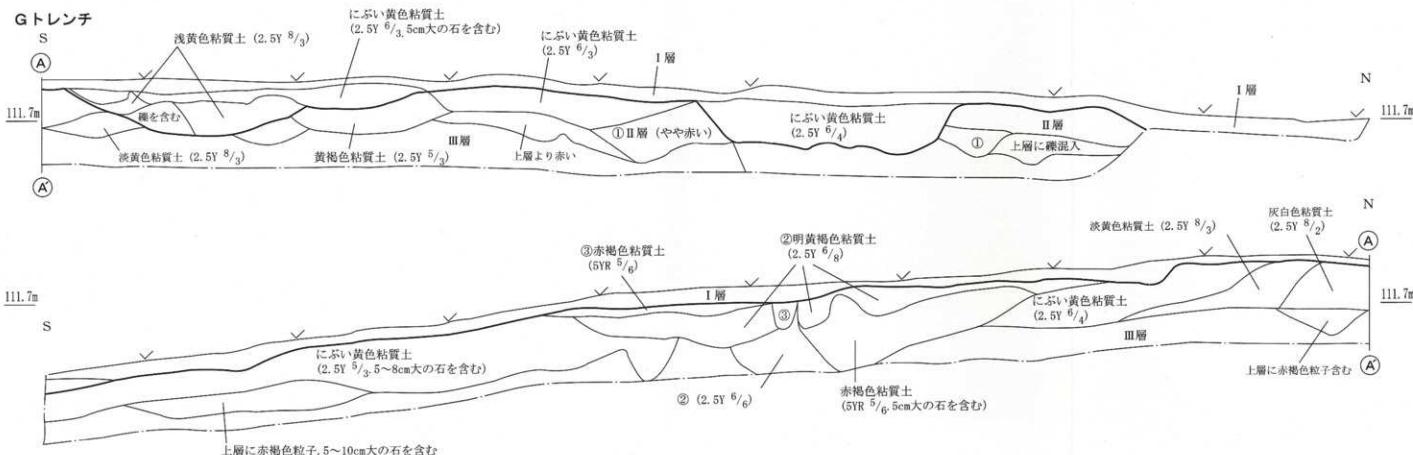
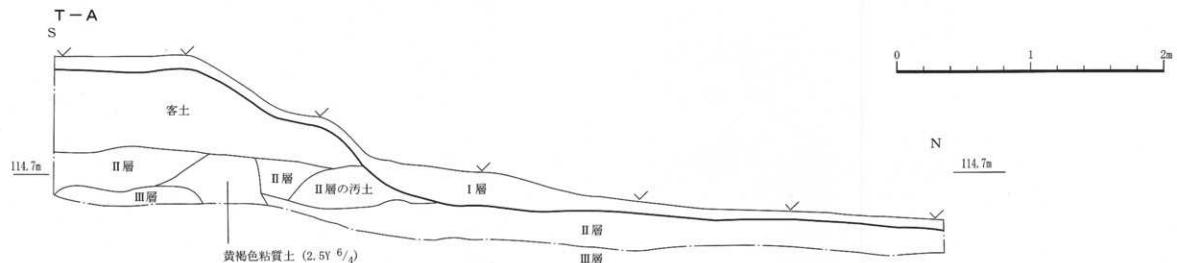
T-E 西壁



T-F 西壁



第11図 西尾根地区 T-B, C, D, E, F 土層断面



第12図 T-A, G, I 土層断面

不明遺構

調査区の北西に東から東西15m、南北7.5m、深さ1.5mと、東西15m、南北10m、深さ1.2mの2箇所の落ちこみが存在した。

落ちこみはいずれも、北側の斜面地側の肩は崩壊しており、中央部は若干、壅んでいた。土壌構築の際の土取りあとではないかと推測されたが、顕著な根拠は認められず性格は不明である。

第4章 その他の調査

第1節 西尾根地点

調査区域内の西、熱処理工場棟の西側に小さな谷を挟んで南へ派生する尾根上平坦面、東西の距離85m、南北の距離100mの範囲に、遺構確認のため東西1.5m×南北5m×深さ0.5mのトレンチ5箇所(T-B～T-F)を南北の等間隔に直列して設定した。

トレンチの層序は、北側の本調査区とほぼ同様であった。

調査の結果、遺構、遺物は各トレンチで確認されなかった。

第2節 本調査区外東西の調査

本調査区の範囲は、開発計画に基づく範囲として設定した反面、東側はすぐに谷部がせまること、西側は分布調査の段階で土壌が目視できなくなった地点であることの二点を根拠として、本調査区を設定した。よって実際の東、西限とは決定できないため、調査終了間際であったが、土地所有者であるミヤナガのご好意により、土壌の延伸を確認するためトレンチ4箇所(T-A, T-G, T-H, T-I)を設定し、精査することができた。

東側は、本調査区の東端から谷部まで10m前後しかなく、また、工場造成の際、若干の改変を受けていると考えられたため、T-Aの1箇所のトレンチを設定した。その結果、土層断面に土壌の痕跡を確認した。また、トレンチ中央部の地山と考えられる層から、柱穴が検出されたが中央部からの検出で切り込みの層のレベルや、また、遺物も検出されなかつたため時期や性格については不明である。またT-Aのさらに東側の谷、並びに傾斜面で土壌は肉眼では観察されなかつた。

西側では、西に派生する尾根上平坦面、東西の距離100m、南北の距離40mの範囲にT-G, T-H, T-Iの3本のトレンチを設定した。T-Gは本調査区の土壌ラインの延長線上で設定し、土層断面に土壌の痕跡を確認した。さらにそのライン上を確認しようとトレンチ設定を考えたが、尾根自体がやや南にカーブしていき、ラインが平坦面からははずれ、あまり距離無く谷部への傾斜面となり設定できなかつた。またその傾斜面、谷部に土壌の延長は観察できなかつた。

そこであらためて土壌延長線上から外れてT-H, T-Iの2本を同一尾根上の平坦面に設定したが、土壌は確認できなかつた。

この結果に基づき、福井土壌Eの東西長は、おそらく、260mに達すると思われる。

第5章 遺物

出土した遺物は石器（石鏃）と土器の小片のみである。

第1節 石 器

石 鏃

出土した遺物は石器（石鏃、スクレイパー）と土器の小片のみである。1は、確認調査において出土したもので無茎式、中央は肉厚である。2は、No. 8区のI層から出土したもので、有茎式、茎部は欠損している。全体に薄く調整も雑であり、未製品のような感を受ける。3は、No. 9区のI層から出土したものである。無茎式で全体に薄く、縁辺にわずかであるが鋸歯状の痕跡を認める。

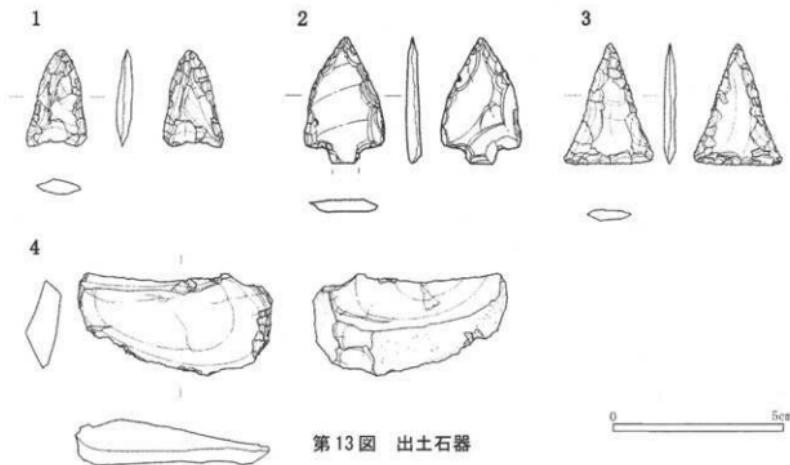
3点とも、I層中であったためか、全体的に磨耗している。

スクレイパー

4は、No. 7区のI層から出土したもので、多様な小型の剥片の一つを利用したものと思われる。また、縁辺を二次加工した痕跡もわずかに認められ、切削動作がしやすいような形状をしている。

No.	地 区	遺 構	器 種	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量
1	確認調査	表土	石 鏃	サヌカイト	29.0	18.5	4.5	2.1
2	8	表土	石 鏃	サヌカイト	37.5	24.0	3.5	3.5
3	9	表土	石 鏃	サヌカイト	35.5	27.0	3.5	2.3
4	7	SX-01	スクレイパー	チャート	30.0	56.5	10.0	17.0

表2 石器観察表 (mm・g)



第13図 出土石器

第2節 土 器

土器は中世の須恵器の小片と土師器の小片が各1点、I層を除去中に検出したのみであった。

第6章 まとめ

第1節 福井土壘の復元

分布調査で確認された現状では、東西に全長約200m、高さは肉眼で地表面からわずかな微細な隆起~60cm前後で、成人が簡単にまたぎこせるようなものであった。しかし、調査の結果、土壘の規模は、検出長260m、基底部幅1.9m~2.85m、高さは溝底部より残存高で0.3m~0.6mを測る。また、土壘の盛土の積み方については、前後の溝内に堆積していた土が盛土であったと考えられるが、埋土は比較的きれいな土であったため、平面での溝の存在を確認することは非常に困難であった。このことは比較的短時間で崩壊し、溝が埋まっていたと考えられ、盛土を堅固にするための版築や、石や砂を混入するなどの工法も取らなかつたと思われ、土壘幅やラインについては一定の計測があつたと思われるが、盛土については単純に土を積み上げ、木材製の道具で整形する程度であったのではないかと考えられる。やはり、そこには一刻も早く短時間で土壘を築造する事情があったと考えられる。

盛土の積み方は前述のようであったが、高さについてはどうであったのかを、簡単な土木工学を参考にして以下のように推測してみた。

測点 No.	断面積 A m ²	断面積 B m ²	断面積 V=A+B m ²	平均 断面積 m ²	測点間 距離 m	土 量 m ³	備 考
1	0.236	0.379	0.615				
2	0.420	0.356	0.776	0.696	20.00	13.91	
3	0.429	0.407	0.836	0.806	20.00	16.12	
4	0.425	0.582	1.007	0.922	20.00	18.43	
5	0.935	0.748	1.683	1.345	20.00	26.90	
6	0.687	0.670	1.357	1.520	20.00	30.40	
7	1.066	0.734	1.800	1.579	20.00	31.57	
8	0.405	0.513	0.918	1.359	20.00	27.18	
9	0.355	0.338	0.693	0.806	20.00	16.11	
10	0.698	0.425	1.123	0.908	20.00	18.16	
計					180.00	198.78	

表3 調査による掘削断面・掘削土量

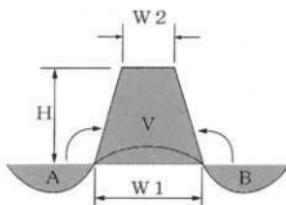
測点 No.	断面積 V m^2	盛土底辺 W_1 m	仮定上幅 W_2 m	高さ H m
1	0.615	2.55	0.25	0.43
2	0.776	2.20	0.25	0.63
3	0.836	2.40	0.25	0.63
4	1.007	2.60	0.25	0.70
5	1.683	2.60	0.25	1.18
6	1.357	2.00	0.25	1.20
7	1.800	2.30	0.25	1.41
8	0.918	2.70	0.25	0.62
9	0.693	2.70	0.25	0.46
10	1.123	2.00	0.25	0.99
計				8.250
		平均		0.825m

表4 土壘高さ計算表

- 各測点ごとに高さを求めると、バラツキが出るので土壘の機能を考慮し、高さは一定と考え平均値を求めた。
- 測点は、ほぼ中央部を横断するように設けた東西のラインの各ポイント (20 m ピッチ)
- 仮定上幅は W_2 の 0.25m は、人が最低歩ける幅と想定した。

計算の結果、高さは約 82cm 程となったが、土壘前後の溝の底部までの深さが、約 40 ~ 60cm 前後であるから、その両者を加えると 120cm ~ 140cm 程になる。あくまで仮定の計算であるから、確定はできないが、いわゆる人、荷物を運ぶ馬や車を阻む程の規模は十分に有していたと考えられる。

また、土壘上での木柵等の構築物については、土壘の残存盛土や直下の地山、溝内床面を精査し、検出につとめたが、顕著なピット等の遺構は検出されなかった。しかし、前述した高さを有していたなら、地山まで達するような堅固な構築物は無くとも、盛土中で掘削した簡易な構築物が存在していたかもしれないが、大部分の盛土が崩壊しているので不明である。



- 高さは考えず両側より盛る
 $V = A + B$
- W_2 は0.25mと仮定する
- 高さHを求める
- 計算式
 $(W_1+W_2) \div 2 \times H = V$
 $H = V \div ((W_1+W_2) \div 2)$

第2節 炭土坑について

今回検出された土坑は幅1m前後×3.5m、4m前後と深さ10～20cmの方形を呈していた。市内志染町戸田遺跡でも同様にこの炭土坑が確認され、同遺跡の報告書の中で「炭土坑」と報告されており、本報告書においても「炭土坑」と呼称する。

研究史については、前述の報告書にゆだねるとして、今まで同種のものは「焼土坑」、「焼成遺構」、「窯状遺構」などさまざまに呼称され、報告されてきた。その大まかな特徴として短辺に突出部を有し、床面にピットや溝を有するものもあり、谷沿いや緩やかな丘陵斜面に位置しても、必ず床面が水平で、浅い皿上を呈している。また、埋土は多量の炭化物であり、遺物の混入することはほとんど無く、稀少な例として奈良～鎌倉時代の土器片を検出したものもあり、時期的には奈良～鎌倉時代とされている。先述の市内戸田遺跡で検出された炭土坑は、上層の包含層などの関係から、13世紀前半以前と報告されている。

今回の調査で検出された、いわゆる「炭土坑」は、立地、規模、床面形態、埋土が多量の炭化物であったことはその条件におおむね合致するが、(床面に一箇所ピットを有していたものがあったが)突出部や床面の溝などは有していないかった。また、遺物が無く、ただ炭、灰、焼土が多量に混入していたのみであり、時期を決定することはできなかった。ただ、No.3については、土壘の北側の溝を切り込んでいたり、埋土は焼土塊のみであったので、あるいは今までいわれてきた時期からすると、別な性格の遺構かもしない。

「赤松町遺跡」発掘調査報告書(1992)の中で、「炭溜り土坑」として村尾政人氏が形態分類をされている、その分類によれば1類(素掘り土坑)にあたっており、本遺跡検出の炭土坑No.1、No.2は、A-1、No.3は、C-1、No.4-D-4、No.5-B-1、No.6-C-1、No.7-A-1に相当するが、その詳細についてはさらに、市内の出土例の増加を待つてあらためて検討したい。

参考文献

淡神文化財協会、赤松町遺跡調査団『赤松町遺跡』 1992年

第3節 福井土壘E遺跡のすがた

静かな台地の北端の森に矢を射り、獲物を求める古代人がかけめぐっていたが、人も住まいすることなく単なる狩猟場にすぎなかつた。やがて、古代の終わりから中世頃になって、人が突如、生活に欠かすことのできない燃料の木炭を作るため、木を切りその場で炭を焼きだした。それがいつまで続いたかはわからないが、1578年の三木合戦の火蓋が切られるとともに、当遺跡の歴史が急展開を遂げる。

福井土壘Eは、言うまでもなく、三木城の兵糧攻めに際し、別所方を支援する勢力の主に南側から兵糧搬入を阻止するために築かれた封鎖線というものであった。もちろん単独で機能するものではなく、直線距離で東西4kmにも渡り、延々と築かれた多重土壘の内側の一地点である。しかも、福井土壘Eに限つていうと、すぐ北に谷部を隣接する

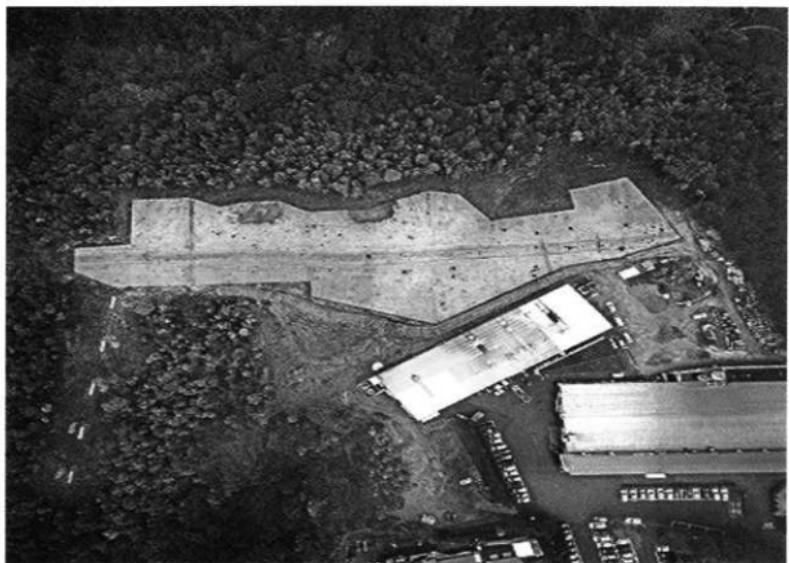
が調査の結果からも、かなり堅固な土塁を構築して敵の行く手を阻むことを、周到に考えていたことが推測できる。また、天正7年（1579）4月、織田信忠が秀吉の援軍に下り、付城をさらに構築した際、本土塁も共に構築されたと推測されている。しかも、6月には兵糧を運ぶことが難しくなった意味の記録も見られることから、2ヶ月余りの短期間の間に多重土塁が出来上がっていた・・・作らなければならなかつたということは、土塁の盛土の方法が簡易なことからも伺える。

なお、現在、三木市教育委員会では、三木合戦の所産である三木城、付城群、多重土塁を国の史跡にするべく準備を進めており、総合調査報告書の発刊が同時のため、考察等は差し控え、詳細は総合調査報告書に委ねる。

最後に、蛇足ではあるが、本土塁を調査中に常に感じていたこととして、戦国武将たちが群雄割拠した時代の真っ只中、凄惨な戦いの舞台であるこの福井土塁E地点に、人の気配がないこと。遺構は、土塁と溝だけであるし、遺物も検出していない。人が作り、使ったはずであるのにその証拠となるものがない。付城と付城の間に土塁が築かれ、連絡通路的に使用されたであろうに、行きかう武将たちはそこで何もせず、落し物一つしなかつたのであろうか、まして、土塁を構築する際、短期間で極めて大掛かりな工事をしたにもかかわらず、何も残るもの、落とすものが無かつたのであろうか。調査面積は約7,300m²にもわたる広範囲であったのだが・・・今でも不思議でならない。



現地説明会風景



調査区（南より）



調査区（北より）



調査区（東より）



調査区（南東より）



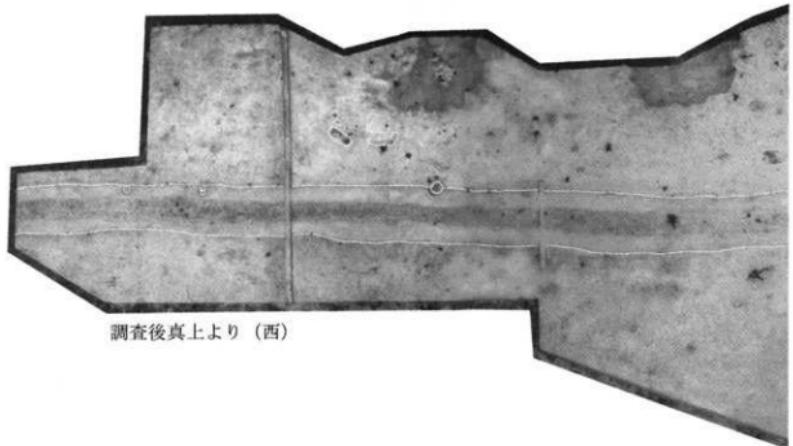
遺構検出状況（東端より）



遺構検出状況（中央部から西方向へ）



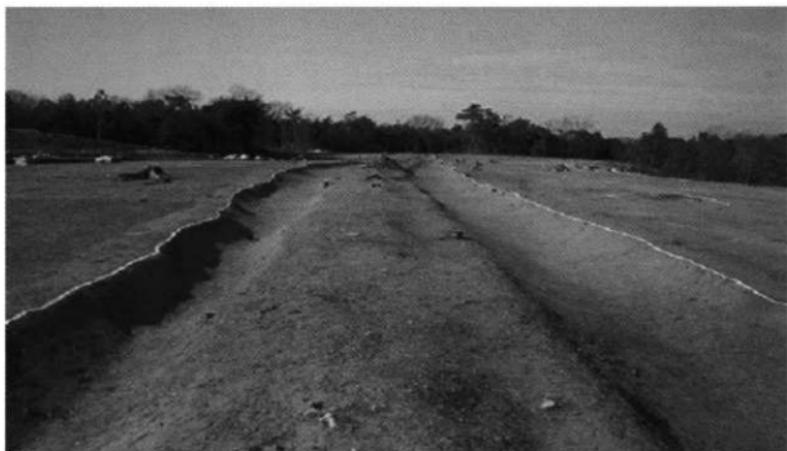
調査後真上より（東）



調査後真上より（西）



調査後（東端より）



調査後（中央部から西方向へ）



調査後（中央部から東方向へ）



調査後（北から南方向へ）



T-2 土壘土層断面



T-3 土壘土層断面



T-6 土壘土層断面



土壌の状況（正面から）



土壌の状況（斜めから）



土壌の状況（横から）



炭土坑 1 (南より)



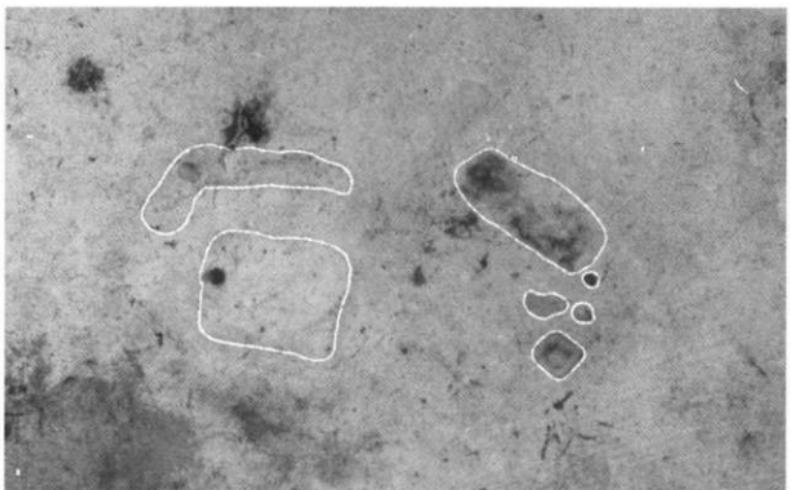
炭土坑 2 (南より)



炭土坑 3 (南より)



炭土坑群検出状況（西より）



炭土坑群精査後（真上より）



西尾根地区（北より）



B レンチ（南より）



B レンチ土層断面（西壁）



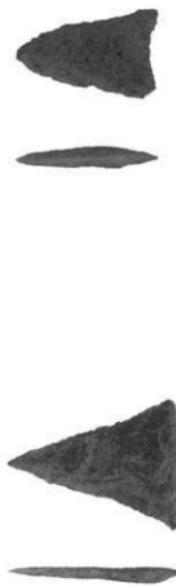
F レンチ（北より）



F レンチ土層断面（西壁）

1

2



出土遺物（石器）



福井土星G（東より）



福井土星G（西より内部）



福井土星G（土星越しに雌岡山を望む）



発掘調査風景



木の根の除去



本調査区南西廃土風景

編集後記

まずは本書の刊行が遅延し、関係者の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

三木城の意義

「三木合戦」は、全国的に有名な出来事です。

秀吉の戦法は”三木の干殺し”と呼ばれ、別所方を城にたてこもらせ城内の食料を断つ兵糧攻めでした。秀吉は、三木城の周囲を囲むように30余りの付城（砦あと）を作り、三木城を監視し、精神的圧迫を与え、今回調査された「福井土塁」のような多重土塁も築き、三木城へ運ばれようとする兵糧の道をも断ってしまいました。それにより、三木城内は飢餓地獄となり、今の私たちの想像を絶する光景が広がっていましたと思われます。三木合戦という今から430年ほど前の中世戦国時代の事とはいえ、私たちのふるさと三木が凄惨な戦いの場となり、多くの血が流れたであろうということは、大変、悲しい歴史だと思います。

これから私たちちはこの歴史を悲しいだけのものとせず、そして、風化させないためにも、三木合戦の遺構を単なる郷土の文化財として保存するだけではなく、平和を希求するシンボルとして末永く保存して行くことが責務であると思います。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふくいどるいいせいきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	福井土星E遺跡発掘調査報告書							
副書名	株式会社 ミヤナガ工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	三木市文化研究資料							
シリーズ番号	第21冊							
編著者名	畠中 剛							
編集機関	兵庫県三木市教育委員会							
所在地	〒673-0492 三木市上の丸町 Tel.0794-82-2000							
発行年月日	平成22年（西暦2010）3月31日							
(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふくいどるい いせいき 福井土星E遺 跡	三木市 福井	市町村	遺跡番号			確認 H17.7.19 ~8.3	確 認 37m ²	民間企業 工場開発
		28215	No.346	34° 46' 46"	134° 59' 20"	本調査 H20.9.7~ H21.1.17	本調査 7,300m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福井土星E遺跡	三木合戦包圍 網多重土星	土星跡	戦国時代	土壘、溝、土坑	石器 須恵器、 土師器小片			
	炭土坑	中世						

三木市文化研究資料 22集

福井土塁E遺跡

—株式会社 ミヤナガ 工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010.3 発行

編集行 兵庫県三木市教育委員会
〒673-0492 兵庫県三木市上の丸町10-30

協力 株式会社 ミヤナガ
〒673-0433 兵庫県三木市福井2393番地

印刷 有限会社 アムキー
〒669-1317 兵庫県三田市宮脇54-1